

## 私の一冊

社会福祉学科 今泉利 先生

荒井洸著『倉橋惣三・保育へのロマン』

小鹿図書館 : 376.11/A 62 (フレーベル館)

わが国の幼児教育の父、日本のフレーベルとよばれた倉橋惣三という人物がいる。著者、荒井は「倉橋は、私からすると、ちょうど祖父の世代の人。明治15年の生まれです。しかし、それにしても少年時代から成年時代にかけて、ちょうど日清戦争だの日露戦争だのと世の中が沸いていたころの男性にしては、ちっとばかり変わった道を選んだものだなあ。なぜかって、バンカラが主流だったあのころに、学生帽をかぶった青年が、女性と子どもの世界だった幼稚園に足しげく出入りしていたなんて……。それでいて、なかなか心の強いところもあるらしく、気骨のあるクリスチャンで有名な、あの内村鑑三の勉強会に通っていたというのです。そうしてみると、やはりなかなかの人物に違いない。考え方に深みのある人に違いない。」とっています。

私自身、25年前に幼児教育課程の大学に通った頃、男子はクラスに1人だけだったことを思い出します。当時、家族や親戚あるいは隣近所さらには多くの友人からも「おまえは、変わったやつだなあ」と言われました。ですから、明治生まれの倉橋にとっては想像もつかないほどのプレッシャーがあったことと思います。そう考えると何故、倉橋はその道(仕事)を突き進んでいったのであろうか。ロマンや夢の感じられない仕事など、力が入るわけがありません。私も今の仕事をしていて、それは実感しております。

ちなみに倉橋家は、代々、徳川の旗本であった。惣三の父、政直は、静岡県富士郡芝富村で、20歳で村長をしたという。やがて、判事を志望して、試験に通って判事となり、裁判所につとめていたが、のち、静岡に帰って弁護士を開業している。惣三は、静岡市鷹匠町で明治15年に生れた。このことから倉橋惣三は、保育のことがらばかりではなく、気になる人物といった存在なのです。

この本の著者、荒井は「新しい世紀のスタートに際し、世の中のいろいろな面に新鮮な動きが読み取れるようになったいま、私たち保育界にある者としては、テクニカルなことについてもさることながら、人間のこととしての保育の本質論に、思い切って深く立ち向かっていく必要があるのではないかと考えます。そういう意味で、かつて倉橋が発言し続けた、現在のわれわれにも読みごたえのある保育の本質論とロマンとを、じっくりと読み取るようにしたいのです。」とっています。

このことを胸に、今一度、人生とは何かを考えながら、ロマンや夢について思いを馳せてみてはいかがでしょうか。とても勇気と希望の湧く一冊です。